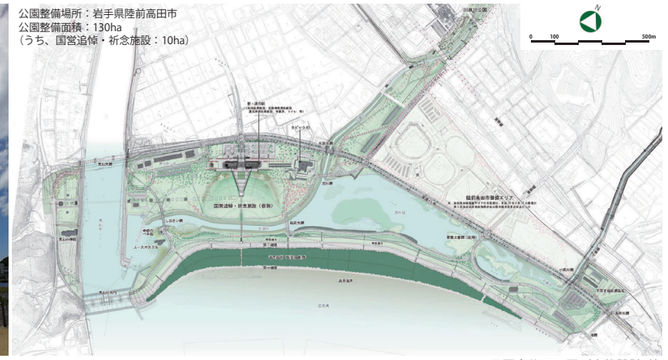
高田松原津波復興祈念公園　国営追悼・祈念施設

国営追悼・祈念施設の造園土木（エリア全体）の基本・実施設計 ―――― 株式会社プレック研究所
管理棟（道の駅高田松原＋東日本大震災津波伝承館（展示除く））の建築設計 ―― プレック研究所・内藤廣建築設計事務所設計共同体

発注者 ――― 国土交通省東北地方整備局東北国営公園事務所
設計期間 ―― 2015 年 7 月～ 2019 年 3 月

規模 ――― 約 2.0ha（「祈りの軸」を中心とする一部開園エリア）
施工期間 ―― 2017 年 10 月～ 2019 年 3 月

高田松原津波復興祈念公園は、東日本大震災が未曾有の大災害であったことを鑑み、国・岩手県・陸前高田市が連携し、復興の象徴として整備するものである。このうち、国が整備する国営追悼・祈念施設は、閣議決定された、①東日本大震災による犠牲者への追悼と鎮魂、②震災の記憶と教訓の後世への伝承、③国内外に向けた復興に対する強い意志の発信の３つを目的とした本公園の中核を成す施設である。
本作品は令和元年 9 月 22 日に一部開園した「祈りの軸」を中心とする約 2.0ha のエリアを対象としている。

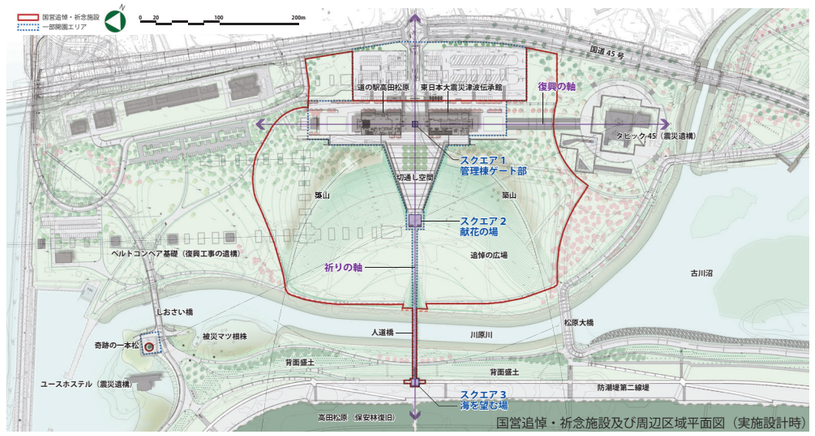


公園全体平面図（実施設計時）

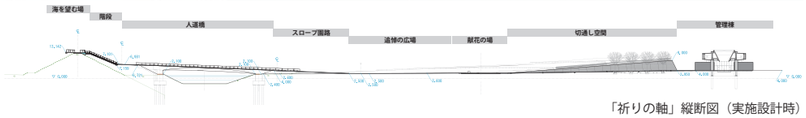
空間構成の基本的考え方

国営追悼・祈念施設は、津波の来襲した広田湾から津波が遡上した気仙川へと至る「祈りの軸」を中心に、奇跡の一本松、震災遺構タピック 45（旧道の駅）、海岸防潮堤等と一体となった追悼の広場で構成している。
かさ上げ市街地側の日常空間と追悼と鎮魂の非日常空間の結界として管理棟を配し、両翼の築山による凹状の地形と海側へ絞り込まれた切通し壁により、「祈りの軸」を象徴的に表現している。
また、園路の縁取りや人道橋の高欄形状による軸線の強調、縁石等の日常的な素材感の排除等により、「祈りの軸」を明快なラインとして仕立てている。

基本設計では、「空間デザイン検討委員会」（委員長：篠沢健太　工学院大学教授、副委員長：平野勝也　東北大学准教授）でデザイン検討を進め、実施設計では、基本計画当時の内藤廣委員をアドバイザーに迎え、細部に至る議論を重ね、造園、土木、建築の垣根を越えた一体的な検討を行った。



国営追悼・祈念施設及び周辺区域平面図（実施設計時）

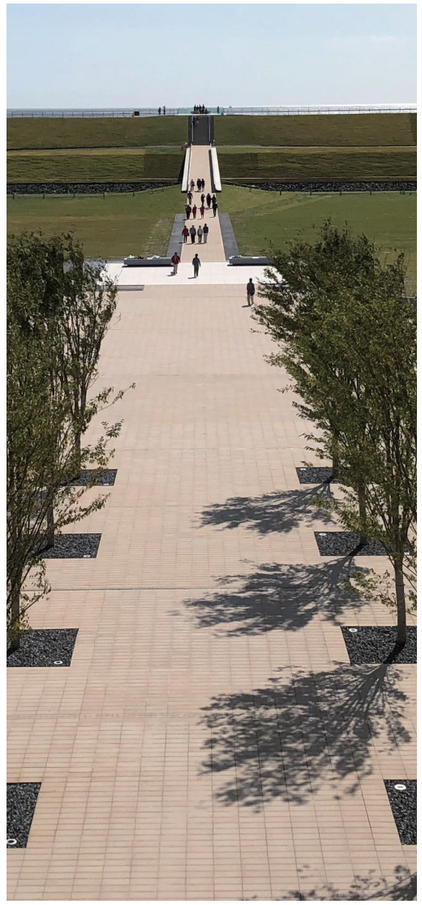


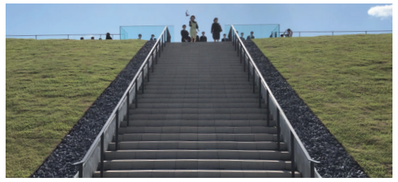
「祈りの軸」縦断図（実施設計時）

追悼・鎮魂の憶いを深化する３つのスクエア

「祈りの軸」では、神社における“鳥居･手水舎”、“拝殿”、“奥宮”のように、非日常空間の中で徐々に追悼・鎮魂の憶いを深化させる３つのスクエアを配置している。
光を照らす水盤、献花の場を囲う水の縁取り、最後は眼下に広がる海と、それぞれ異なる水で３つのスクエアをつないでいる。

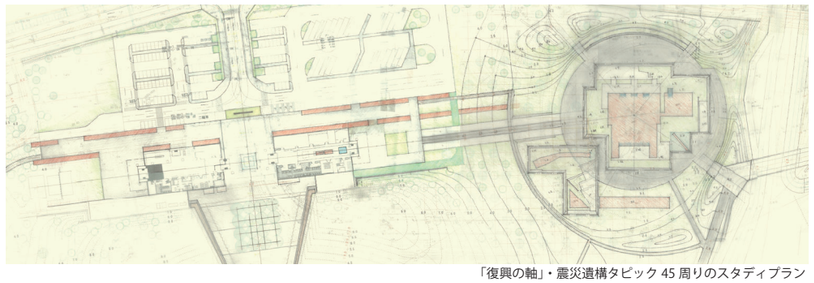
○管理棟ゲート部（鳥居・手水舎）：「祈りの軸」と「復興の軸」が交わる大屋根部に開口を設け、自然光が水盤を照らす、未来に向け復興を感じる場を形成
○献花の場（拝殿）：「祈りの軸」と奇跡の一本松･震災遺構タピック 45 を結ぶ線との交点に、海に向かって一筋の「祈りの軸」を見ながら花を手向ける場を形成
○海を望む場（奥宮）：川原川を渡河して辿り着く「祈りの軸」上で唯一広田湾を一望できる、津波が押し寄せた海と厳粛な想いで対峙する場を形成





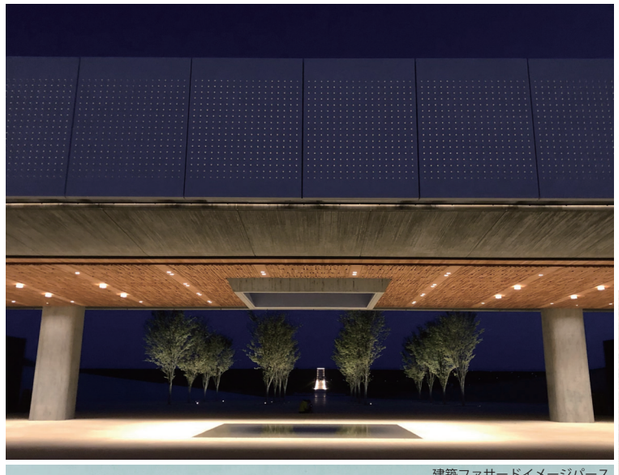
象徴性を発揮する２つの主軸

「祈りの軸」は、追悼式が執り行われる切通し空間から慰霊碑的モニュメントとして、海に向かって徐々に立ち上がるコンケイブ状の縦断形を形成し、防潮堤で遮蔽された海の存在を示唆現している。
「祈りの軸」の起点に位置する管理棟では、災害の脅威を伝える震災遺構タピック 45、その教訓と伝承のための東日本大震災津波伝承館、明日を生きる暮らしと共にある道の駅高田松原からなる「復興の軸」をコンセプトに据え、「祈りの軸」と「復興の軸」の 2 つを主軸に、諸室配置等を行うとともに、屋内外が一体となったランドスケープを展開している。



「復興の軸」・震災遺構タピック 45 周りのスタディプラン

追悼・鎮魂の憶いを刻む大屋根のファサード



管理棟は、大屋根を梁とした大スパンの RC 造とし、大屋根の厚みのあるファサードにより公園のゲート性を強調している。さらに、震災の事実を風化させないために、このファサードには全国の犠牲者数分の孔を設け、後世にわたって市街地を淡く照らし続ける光の帯を表現している。

建築ファサードイメージパース